

《修論報告》

授業コミュニケーションを通じた情緒的なつながりの形成
—私立通信制高校における国語科授業の分析から—

キーワード：コミュニケーション教育、情緒、状況論、フィールドワーク

高橋 佑希

1、問題の所在と目的

本研究は、状況論 (situated perspective) の立場から、従来のコミュニケーション教育の内容論の問題点を明らかにし、知識伝達的な授業・学習観の再考を通じて、子どもたちがコミュニケーションをめぐる抱える問題を解消する授業コミュニケーションの展望を示すことを目的とした。

現在、国語科教育では「話すこと・聞くこと」の領域を中心に、コミュニケーションの教育がおこなわれている。「コミュニケーションや感性・情緒、知的活動の基盤」(中央教育審議会, 2008)と位置づけられる国語にとって、コミュニケーション教育の充実が重要な課題である。

また、コミュニケーション教育の充実が求められる背景には、子どもたちが自分に自信をもてないという現状がある(同上)。情報の伝達や意思の疎通は普遍的な営みであるが、それに伴う諸問題については、同時代的な視点から解決が図られねばならない。そこで本研究では、2つの観点からコミュニケーション教育の充実と改善を講じた。

第1は、コミュニケーション観の見直しである。コミュニケーションに過剰な価値や期待がおかれる社会において、その能力が個人に還元されることは、コミュニケーションの「失敗」に伴う不利益が「自己責任」とみなされることを意味する。しかし、コミュニケーションが二者以上によって成り立つことを踏まえれば、その「失敗」をいずれかの個人の責任として問うことは実情にそぐわない。したがって、個人主義的なコミュニケーション観は見直されねばならない。

第2は、コミュニケーション教育の内容論の見直しである。コミュニケーション能力の発達には、環境との相互作用や他者への共感性など複層的な要因が関わっている(山元, 2013, p.89)。そのため、コミュニケーション教育を論じるにあたっては、国語科の授業において意図的におこなわれる表層面のコミュニケーション指導だけでなく、教室に生まれているコミュニケーション状況その

ものを問題にする必要がある(山元・稲田, 2008, p.63)。

2、研究方法

個人主義的なコミュニケーション観と知識伝達的なコミュニケーション教育の内容論を見直すためには、子どもたちがどのようなコミュニケーションをめぐる困難を抱え、実際の教室空間で、どのようにコミュニケーションを協同作業として営んでいるのかを明らかにする必要がある。その目的を達成するために、本研究では次の2つの方法を設定した。

方法Ⅰ：文献調査

現代の子どもたちが抱えるコミュニケーションをめぐる困難と、コミュニケーション教育の現状を究明する。

方法Ⅱ：フィールドワーク調査

具体的な授業場面の事例を基に、教師と生徒によるコミュニケーションの様相を記述する。

また、本研究では状況論 (situated perspective) の立場から、具体的な授業場面における教師と生徒のコミュニケーションを論じた。状況論とは、「人格、記憶、学習などの人の心の機能を、様々な道具を介して各々の立場から関わり合う、集合体ないし状況と切り離さず捉える見方」である(香川, 2011, p.62)。状況論の立場を採用することによって、個人的な心的現象と考えられがちな認知や学習を記述し、解釈することが可能になる。

3、論文の構成

修士論文の構成は下記の通りである。

序章 本研究の目的と概要

第1章 コミュニケーション教育の構造と現代的な問題

第2章 調査方法・分析方法

第3章 授業場面におけるコミュニケーション・スタイルの検討(1) —生徒たちの「おし

「しゃべり」を包摂する教師の対応—

第4章 授業場面におけるコミュニケーション
・スタイルの検討(2)—授業のワークをデザインする生徒たちの「笑い」—

第5章 授業場面におけるコミュニケーション
・スタイルの検討(3)—学校的学習と「遊び」の間の「状況の定義」の揺れ—

終章 本研究の成果と課題

第1章では調査課題の設定、第2章では方法論的検討、第3章から第5章ではある通信制高校におけるフィールドワーク調査に基づく事例研究をおこなった。

事例研究では、具体的な授業場面におけるコミュニケーションを記述・分析するにあたり、3つの分析方法をとった。第1は特定のカテゴリに基づく発話のコーディング(第3章)、第2はエスノメソドロジー(ethnomethodology)の分析方法のひとつである会話分析(conversation analysis)(第4章)、第3は発話参加者の「状況の定義」(definition of situation)である。

4、結果

第1章では、現代の子どもたちがコミュニケーションをめぐる抱えている問題を明らかにするために、近年の社会言説や学校・教室空間のあり方を批判的に検討し、授業コミュニケーションに関する調査課題を設定した。

第3章では、教師側に視点を置き、教師が「不適切」な発話とみなされがちな「おしゃべり」を、学習のためのコミュニケーションとして包摂し、さらに学校的に価値づけられる発話のジャンルに方向づける様相を記述した。

第4章では、生徒側に視点を置き、生徒たちが学習課題をこなすなかで生じた「笑い」が、学習のための相互行為のデザインであることを明らかにした。また、その「笑い」は相互行為に発話によって参加していない生徒を含む、教室全体のデザインにつながっていることを明らかにした。

第5章では、教師と生徒の間の「状況の定義」がずれている場面の分析を通じて、学校的学習から逸脱した「遊び」という「状況の定義」が授業コミュニケーションのあり方自体の変容を可能にすることを論じた。

5、考察

授業にさまざまなコミュニケーション・スタイルを取り入れることにより、生徒たちが授業・課題のためのコミュニケーションに包摂されていく可能性が示された。また、授業は教師が単声的に展開しているのではなく、本来的に多様なコミュニケーション・スタイルが内在する形で遂行されていた。コミュニケーションのあり方は、教室空間の「いま・ここ」において、教師と生徒が協同的に決めていくものである。

豊かなコミュニケーション能力を育むためには、互いの異質性を認めた上で、相手のことを分かり合おうとする情緒的なつながりの形成が必要である。そうした情緒的なつながりを形成するためには、個人対個人の関係ではなく、「学級という社会的共同体」(山元, 2004, p.6)全体への視野をもたなくてはならない。

6、引用・参考文献

香川秀太(2011)「実践知と形式知、単一状況と複数状況、分析と介入、そして質と量との越境的対話——状況論・活動理論における看護研究に着目して」『質的心理学フォーラム』3, pp.62-72.

中央教育審議会(2008)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」文部科学省, 2008-01-17. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/fieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf, (参照 2017-01-19) .

本田由紀(2005)『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版, (日本の〈現代〉, 13) .

山元悦子(2004)「国語科におけるコミュニケーション教育の方向」『国語科教育』(56), pp.6-7.

山元悦子(2013)「話すこと・聞くことの発達論に関する研究の成果と展望」全国大学国語教育学会(編)『国語科教育学研究の成果と展望 II』学芸図書, pp.85-92.

山元悦子・稲田八穂(2008)「コミュニケーション能力を育てる国語教室カリキュラムの開発—発達特性をふまえたコミュニケーション能力把握に立つて—」『福岡教育大学紀要』(57)第1分冊, pp.59-76.

(横浜国立大学大学院 教育学研究科)